

花見会



三月末夫が地区の公民会長に選出された。東京から戻ってまだ五年も経ていないし、近所付き合いも上手とはとても言えないから、意外であった。公民会長と言えば聞こえはいいが、実際は役場の雑用の下請け係といったもので、煩瑣な仕事が主体のあまり割に合わない役である。ものぐさな亭主には適役とはとても言えないが、選挙で一票も入らなかつたとしら、それはそれでうら淋しい思いをしたのかも知れない。それに何時かはお鉢が回ってくるころだろうから、あまりヨボヨボになってからよりは、この辺でご奉仕しておくのが正解なのだろう。

最初の大仕事は花見会である。このあたりでは、花見会、敬老会と年一回老若男女がお弁当持参で集まって、余興や一杯酌み交わすのを楽しむのが習わ

しとなっている。

今年は四月九日曜日、お天気がよければ十一時から屋外ゲーム、それからお決まりの総会で新役員の手摺や会計報告などがありお弁当、余興となる。他を知らないがこの辺は各地区ごとに公民会館を持つている。六十戸足らずのわが地区の会館は、もと旧家の屋敷跡とのことで前庭に桜がある。しかし開花の時期と予定した日曜日がなかなか一致しないから、毎年爛漫の花の下というわけにはいかない。それに今年は天気予報は雨ということだった。

幸い予報は外れて薄日の花見日和の朝を迎えた。十時には出掛けて掃除をするのも役目である。私は一番上等なお重箱におかずとおむすびを二段に詰めて我が家を出た。

会長の亭主が鍵を開ける。古い木造の会館は畳も赤茶け、床もきしむが小奇麗に片付けられている。

役員の女性が四五人、テキパキと茶碗やコップの準備などするが、家事に不器用な私はやる気は満々ののだが、結果的にはただウロウロして終わってしま

った。

定刻になって、若い陽気な奥さん先導でゲームが始まった。「イロミズ」という前方の赤青黄緑色の粉がそれぞれ入っている一升ビンに、茶碗に水を汲んで走って行って注ぎ入れ、早く口まで一杯になった組が勝ちという全く題名そのままの素朴なゲームである。子供からお年寄りまでが参加する雰囲気を楽しむ。私はあわててカメラを取りに戻った。イロミズは終わっていたが、ドッジボールを股くぐりさせて渡すゲームや、ラケットにボールを乗せて落とさずに戻ってくるなど、その姿がいかにも笑いをさそう、単純だが明るいゲームが続いて、私はすかさずパチパチとカメラに収めた。

桜は若葉がちらほらの姥桜、多少お酒の入る食事は賑やかである。若い人達は家族単位に輪になるが、お年寄りは座敷に男性、女性は部屋の外の方敷きを集まるのも、長年の慣習になっているようだ。私はいつも夫の隣に席を取るのだが、よく見ると女衆は女衆でおしゃべりを結構楽しんでるのであって、

どつやら男尊女卑と目くじらを立てるようなことでもないらしい。

前会長が演歌を歌う。すると、昨年子のないまま亡くなった兄の後を継いで、六十年ぶりに故郷に戻ったという九十歳近い老人が立ち上がって、新入りの挨拶がてらに、昔軍隊で夜な夜な歌ったというオツな歌を披露したのは出色だった。家名を継ぐために松元町の家を売って戻って来たという、その老人の意気には頭の下がるものがあった。

食後は恒例の中高生による五つ太鼓とビンゴである。威勢のよい五つ太鼓は、年々の子供たちの成長と上達ぶりに、親ばかりでなく一回目を細めて見入る。

ビンゴの賞品は、若い奥さんたちの腕の見せ所で、今年は薬屋が開店して大売出しがあったとか、実用品をたっぷり仕入れてあって全員に二回当行きだった。沢山並んでいる賞品からビンゴの人が自分の欲しい物を貰うのだが、一番人気は自営の店主たちが差し入れてくれた焼酎だった。子供と一緒にお年寄

りがカードとにらめっこして一喜一憂する姿も微笑ましいものだ。

といった案配で、和やかに一件無事終了。都会生活では味わえない、田舎の温もりを感じさせられた一日だった。

ただ七十歳近い私達が、若者の部類に入るとも思える高齢化の現状。わが地区の小中学生は合わせても十名ほどというのも実に淋しい。地域の活性化がつくづく望まれることである。